**2010年度夏学期月曜５限　世界史論　本村凌二教授**

**今回のテストの前バラシ**

・時間60分　参照不可

Ⅰ（表面に記入すること）

下記のＡ）、Ｂ）について、それぞれ15行程度（550字前後（だいたい皆これくらいになるでしょっていう数らしい。））で論じなさい。　　　　　　　　　　　　　　　　（各30点）

Ａ）前１０００年以前の時代は「神々がささやく世界」であったという仮説がある。この仮説について簡潔に要約した上で、それについて自分の意見を述べなさい。（賛成でも反論でも何でも可）

去年の問題の解答例というものを見つけたのですが、今年にも使えそうなので載せてみます。

（解答例）

J・ジェインズが「神々の沈黙」の中で述べた、当時の人間は神々の声を聞いていたとする仮説である。古代人は論理を司る左脳より想像を司る右脳の方が発達していたため、彼らの心は神々の声を聞く部分と現代人が持つ意識の部分の二つに分かれていた。このため、現代の幻聴のような症状は当然で、古代人は現代人と全く異なる精神構造を持っていた。したがって、古代人は現代人のような自意識を持たず、自らの行動に責任を持たないまま、神々の声に従って行動していた。この仮説は的を射ている。「ギルガメッシュ叙事詩」や「イリアス」のような古典には人間が神々の声に応答する記述が見られるし、神権政治が成り立ったのも人間が神々の声を現実に感じていたからだろう。また、現代でも統合失調症という形でその痕跡が見られる。さらに、前1000年を境に、ギリシア・ローマ法のような法規範や旧約聖書のような宗教規範など、様々な規範が成文化された形で見つかっているのも、神々の声が聞こえなくなって、人間が行為の基準となる規範を必要としたためではないか。（446字）

Ｂ）ヘレニズム期からのシンクレティズムについて、やがてキリスト教が普及していく基盤となるという見通しの下に簡潔に要約した上で、それについて自分の意見を述べなさい。

Ⅱ（裏面に記入すること）

下記の用語について、簡潔に説明しなさい。　　　　　　　　　　　　　　　　（各8点）

５問。バラシ無し。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上

**前３千年期のオリエント世界**

○１万年前～　地球の温暖化

　　　　↓

狩猟・採集：移動→農耕・牧畜：定住

　　西アジアの麦作地帯（やや乾いた乾燥地帯）→羊・牛の飼育⇔麦作

○～５千年前　グリーンサハラ　∵壁画＝人の居住

○５千年前～　寒冷化・乾燥化

メソポタミア

　・南部における灌漑農法の技術革新

→ウルク期シュメール都市化

　　　　人口２０万？　∵麦の生産量増加（生産力７０数倍）

　　　「シュメール人問題」

　　　　民族系統不明、言語はウラル語に近い、自称黒髪人

・文字による記録（粘土板文書）システム＝歴史の成立　　ウルク後期（前3300～前3100）

会計用トークン・印章→絵文字→楔形文字（シュメール語）→90度回転

∵横向きが押しやすい

　・都市国家群の出現
都市的中心の発展と周辺村落の序列化→神殿・聖域の整備（3300の神明、大神小神）

　　　英雄伝説と叙事詩

　　　　「ギルガメッシュ叙事詩」

　　　　シュメール期の都市国家ウルクの君主・暴君ギルガメッシュ（実在）

　　　　人々が天神アヌに訴え、野人エンキドゥ出現→力比べ→友情

　　　　杉の森（レバノン）の怪物フンババの征伐

　　　　　美の女神イシュタルの誘惑→拒絶→イシュタルの派遣した天の牛の猛威

→二人で退治

エンキドゥの熱病死（天罰）→死の恐怖→永遠の生命求める旅

永遠の生命を得たウトナピシュティム（洪水※と箱舟の物語※）との出会い

ギルガメッシュ帰還

※洪水：不定期（∵雪など）→灌漑⇔ナイルの洪水：定期的

※物語：→旧約聖書のノアの方舟に

「アトラム・ハシース」最高賢者の物語（現在のテキストはアッカド語）

１人間の創造→神々に奉仕し労役する（それを当然とする）存在

　∵神にも階級　∴下位の神は死なないため永遠に働く

２人間の増大　∵寿命短い→うるさい→疫病→エンキ神が治療法伝授→洪水

→人間の寿命が縮む　∵老病死、子供を産めない女性

　　　　１２より、まずは現世を大事に、という考え

　・セム語系勢力（もともと傭兵・雇われ人として流入）増大

　　　アッカド王国（前2330？～2150？）　サルゴン王（在位前2334？～2279？）

　　　古アッカド語：シュメール期の文字だけ借りた独自の言葉

　　　　→アッカド語：古メソポタミアのセム語系言語の総称

　　　　シュメール系文化を大事に→翻訳

→シュメール語が長く残る、バビロニア、ヒッタイトでも

　・シュメール人の復興と凋落（ウル第3王朝　前2112？～2004？）

初代国王「シュメールとアッカドの王」＝共存

ジッグラト建設　∵神を祭る＋洪水対策？

衰退　∵灌漑から乾燥・塩害

○メソポタミアの宗教

　・人々は神の声が聞こえた？

　・王と神のつながり　例：祈る王の像

・歴史上の出来事としては成立していない（開祖無し）

　・先史的、自生的、民衆的

　　　秘儀的でない：神々は崇敬され奉仕されるが愛されるのではない

　　　神人同形観

　　　神々の共同体「パンテオン（万神殿）」＋都市神＝神々のあふれる世界→神の序列化

　　　　→単一神化＝自分にとっての守護神、他人は気にしない⇔唯一神＝排他的

　・シュメール人の神々　（シュメール／アッカド　都市名　神殿名）

　　　三大主神　アン／アヌ神（天空神）

　　　　　　　　エンリル神（大気神）　ニップル　山の家

　　　　　　　　エンキ／エア神（大地神）　エリドゥ　深淵の家

　　　三天体神　ナンナ／シーン神（月神）　ウル　光の家

　　　　　　　　ウトゥ／シャマシュ神（太陽神）　ラルサ、シッパル　輝く家

　　　　　　　　イナンナ／イシュタル女神（金星神）　ウルク　天にある家

　　　ニンフルサグ女神（豊穣神・大地母神）　アダブ　大いなる家

　　　エレシュキガル女神（冥界神）　クタ　冥界の家

　　神々の雑踏→「神名目録」の作成、2000ほどの神名

　　　　　　　　大神へのとりなしをする個人神・守護神　「私の神・女神」

　・アッカド人（セム語系の総称）の神々

　　　シュメール人の神々の継承

　　　神々の統合・結合現象　例：ニヌルタ「耕作可能な土地の主」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　１２神格（ウラシュ、ザババ、パプスッカル、ルガルバ　　ンダ、ニンギルス等々）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　自由恋愛の女神イナンナ→女神イシュタル

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　他の女神たちの超自然的役割の吸収・統合

　　　　・メソポタミア宗教の発展段階（T.Jacobsen）⇔現代的な考え方では？

　　　　　　前4000年期　「飢餓の恐怖」　自然の力に対する人間の非力　豊穣への期待

　　　　　　前3000年期　「戦争とその惨害の恐怖」　都市の主神

　　　　　　前2000年期　「個人の不幸への恐怖」　倫理的にも良き生活

　　　　　　　⇔前2000年期後半　神の声が聞こえない　例：モーセ＝一神教

○エジプト

　　　　・先王朝時代

　　　　　　乾燥化・灌漑農耕「エジプトはナイルの賜物」byヘロドトス

　　　　　　農耕の定着　墓地の大型化（階層分化＋交易規模の拡大）

　　　　　　上エジプト（南部の河谷地帯、ナイル上流）における部族国家「原王国の出現」

　　　　・統一国家の形成

　　　　　　上エジプトの領域国家（都市中心に広く治める）王国と下エジプトの都市国家王国

　　　　　ナルメル王の化粧版＝統一実現の伝説上の王メネス？　前３２００？

　　　　・初期王朝時代（前3000？～2625？）

　　　　　　王権の進展：神政国家　王＝祭司

　　　　　　　ファラオ（大きな家）は新王国時代に王を指す

　　　　　　ヒエログリフ※と書記

　　　　　※ヒエログリフ：楔形文字とは完全に別系統、古い形留める美しい左右対称

　　　　　　　→ヒエラティック→デモティック　に簡略化

　・古王国時代（前2625？～2160？）

　　　　　　巨大ピラミッドと太陽神信仰

　　　　　　　「奴隷酷使説」byヘロドトス：10万人の奴隷が20年間で製作＝絶対君主制

　　　　　　　「公共事業説」：7～10月の洪水（土壌は豊かに）による農閑期の農民に仕事を与

え救済する国家プロジェクト

　後者が有力　∵墓の男女比が半々、子供も

　　　　　　　　　　　　複数のピラミッドを残す王も？

　　　　　　　　　　　　文献に「二日酔いで欠勤」

　　　　　　　　　　　　神官の誓約碑文（パンとビール）

　・第1中間期（前2160？～2040？）衰退

　・中王国時代（前2040？～1786？）

　　　南による北の征服という基本構造　中央集権・官僚機構の整備

　　　来世信仰の普及（強烈）　∵ナイルの定期的氾濫の宇宙観　→死者の書

　　　　⇔メソポタミア：信仰はあるが影のよう

　　　来世信仰、オシリス信仰

　　　　死者の魂は冥界、上天、下天のいずれにも住む

　　　　オシリスは死を克服して復活、永生を得た→永生を熱望するエジプト人の規範

　　　　　エジプト王オシリスの善政→弟神セトの嫉妬により謀殺、体ばらばら→妻の妹神

体集めイシスが命吹き込む→復活、冥界の支配者として永遠に生きる

　ばらばらの体に包帯→ミイラの包帯

○エジプトの宗教

　・多神教と動物信仰

大自然の圧倒的な力　∵ナイルのみが人に命、水を与える→人の無力さ

→超越的存在を崇める

天体・自然現象・樹木　特に動物に神の力を認める

　　天神ホルス（隼頭）、ソベク神（ワニ頭）、アヌビス神（山犬頭）

　・神々の秩序体系　（地方の守護神として／職業の守護神として）

　　　ヘルモポリスの主神トト／書記の守護神

　　　第一急淵地方（ナイル上流）の主神クヌム／陶工の守護神

　　　メンフィスの主神プタハ／工人の守護神

　・類似の神の習合

　　　各地の隼姿の天の神→統一王権の守護神ホルス

　・神学　宇宙創造の教義（創造神＝太陽神アトゥム　∵赤道直下→太陽神ラー）

　　　その地域の神官の考え

　　　ヘリオポリス神学

　　　　アトゥム自生、天地創造→自慰で大気の神、湿気の神産み神々の祖先に→この

兄妹神の結婚、大地の神ゲブと女神ヌウト誕生→結婚、オシリスとイシス、セ

トとネフテュス誕生

　　　ヘルモポリス神学

　　　　4組の原初の男女神が太陽創造

　　　メンフィス神学

　　　　創造主プタハが言葉により天地創造

　　※創造主は元から存在＝オリエント神学全体→旧約聖書「神は～創造」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　新約聖書「言葉ありき」

　・強烈な来世信仰

　　　あの世でもこの世でも同じ生活を→絵

古王国時代：神の化身たる王のみあの世へ蘇る（記録は王※についてのみ）

　※王も読み書きできない→書記

中王国時代：普通の人も蘇る

新王国時代：広く普及

　墓、副葬品、ミイラ製作、葬儀（正しい手続き）と供養（飲食物）

　ピラミッド・テキスト→コフィン・テキスト（棺内）→死者の書

宗教文学　呪文集（蘇生のための困難を呪文で乗り越え　例：川渡り※）

　オシルス神の死者の裁判→オシリス神との対面

　　罪の否定告白（42柱に「～はしていません」と言う）

　　陪審の神々への懇願

　※さまざまな地域の来世観に出現

※メソポタミア：法律文書　多　例：ハムラビ法典

　エジプト：少　∵来世信仰＝現世で正しい行いを

**前2千年紀のオリエント世界**

　・シュメール・アッカド文化複合体の形成

　・シュメール・アッカド地域のセム化

　・イシン＝ラルサ（都市名）時代

　　　セム系遊牧民アムル人のシュメール・アッカドへの移住・流入

　　　アムル人のシュメール・アッカド都市文明への順応

　　　　できない者はシリア・パレスチナ等へ

　　　都市国家・諸王朝の混乱（個人の自立・豊かな生活？）

　　　　イシン、ラルサ、エシュヌンナ、バビロン、アッシュール、マリ

　・バビロニア王国（アムル人の一王国によるメソポタミア統一）

　　　バビロン第1王朝第6代君主ハンムラビ（前1794～1750）

　　　ハンムラビ法典：原則同害復讐だが階級により差別

　　　　　　　　　　　裁判の判例集

　　　アッカド語によるギルガメッシュ叙事詩（シュメール文学※の復活）

　　　　※シュメール語は特に宗教言語として残る

　　　数学の高度な知識・天文学の創世期

　　　私経済の繁栄（大農地・動産の私的運営、土地・資産を活用する都市居住民）

○印欧語系諸民族の出現

　・ヒッタイト（前17世紀初～13世紀末）

　　　アナトリアを拠点とした古王国が鉄器と戦車を武器に拡大・発展

　　　服属民は非印欧語族

　・カッシート（印欧語系？）（前16世紀初～12世紀半ば）

　　　ザクロス山岳地帯から移住、公文書はバビロニア語

　・フルリ（非印欧語族っぽい）（前18世紀～14世紀）

　　　北方・東方から北メソポタミア・シリアに移住

　　　諸民族混合、アウトサイダー

　・ミタンニ（前16世紀初～14世紀）

　　　ミタンニ王国（アーリア人＋フルリ人）は馬のひく戦車を駆使　∵調教の文書

○アッシリアの台頭

　・アッシュ－ル：交通の要所

　・ニネヴェに文献収集→アッシリア学

○エジプト　周囲が砂漠→侵略少ない

　・中王国

　・第2中間期（前1786～1542頃）異民族ヒクソス（外来者）の※北方侵略（150年間）

　　　※統一国家としての形を成さない

　・新王国時代（前1542～前11世紀ころ）

　　　アジア遠征の結果　トトメス3世（前15世紀）による最大版図

　　　ラメセス2世（前13世紀）の帝国再建・大規模な建築活動　例：ルクソール神殿

○メソポタミアの宗教２

　・バビロニアの宗教

　　　特徴：これまでの神々から権利を譲り受ける

　　　　　　都市の神　∵都市国家から発展

　　　主神マルドゥク　天空神アヌと大気神エンリルより王権の授与

　　　正義の太陽神シャマシュ

　・アッシリアの宗教

　　　アッシュル神の土地　都市神アッシュルこそ神の中の神

○エジプトの宗教２

　・一神教の登場　∵エーゲ海で火山大噴火（→気温－2℃→太陽神へ）？

　　　テーベに蔓延る神官　政治腐敗

　　　アメンへテプ4世　改名：アクエイアテン

　　　アメン神（太陽神）への帰依（マート信仰＝真＋正＋美）

　　　アマルナ遷都

　　※ヤン・アスマン説

　　　　多神教：儀式と神話中心（暗黙の神学）

　　　　一神教：現実社会を説明する思索（明示された神学）

　　　　　ラメセス朝の「個人の敬虔」（「貧者の宗教」）

　　　　　　＝個人が神に呼び掛け自分を罪深い者として神に委ね助けを乞う

　　　　　超越した神（唯一神）

　　※一つの仮説

　　　　文明の整序化・単純化　例：アルファベット運動（楔形文字、ヒエログリフでも）

　　　　虐げられた階層・民族のルサンチマン（怨恨）

**神々の囁く世界**

○Ｊ・ジェインズ「神々の沈黙」

　　古代人やその文明の背景には現代人と違った精神構造

　　神経系に神のような部分→言いなり

　　声＝現代人の意志

○左脳（言語的・分析的能力）と右脳（直観的・総合的能力）

　　現代人は左脳が発達

○神々の声

　　　文献に「天から警告」「神に判断を述べてもらう」「神は相談役、指導者、語り手」「発

言は比類なし」「神の命令」

○エジプト人の世界観

　　自然界と超自然界の区別があいまい

　　あらゆる神々は創造神プタハの声（舌）の様々な顕現（メンフィス神学）

　　死者の書

　　　バー：霊魂→実体　視覚的

　　　カー：生命力→エネルギー→働きかける力→神々の声（訓戒）　聴覚的

　　　　声正しきものがオシリス（死せる王の声）の国に迎え入れられる

○統合失調症（現代）

　　症例：幻聴が聞こえる、声がアドバイス

　　　　　患者は声の主が全知と感じる（not全能）

　　　　　書き物中は声は聞こえない

　　　　　条件が揃えばだれでも声が聞こえる

○カナン（古代シリア）の宗教

　・農耕への依存

　　　　自然界の豊穣を祈る祭り

　　　　動植物の多産を祈る性的祭儀

　・神々の世界

　　　主神エル：人類の父、被造物の創造主

　　　主なるバアル：荒らしの神、豊穣の神　∵乾燥

　　　主なるヤハウェ（パレスチナ南部・アラビア北西部の未定着遊牧民）

　　　　エジプトのハトホル神を翻訳したもの

　　　アシェラ：神々の生みの親、聖なる娼婦、豊穣多産の女神

　　　　　　　　　→エル・バアル・ヤハウェの配偶女神

　　　アテナ：豊穣の女神（バアルの配偶者にして妹）

　　　アシュタロト：豊穣の女神、配偶の女神

　　　モト：植物の繁茂と枯死をめぐりバアルと戦う

　　　レセフ：死神にして癒しの神という二面性

○ヘブライ人の宗教

　・都市国家離脱者＋牧羊民

　　　ヒクソス

　　　ハビル（アピル）→ヘブライ（モーセの律法以降）

　・モーセの十戒「出エジプト記」

　　　「あなたは私の他に、何ものをも神としてはならない」

　　　「あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない」

　・ヤハウェ「私はある」「主」　ケニア人（メデアン人）仮説？

　・ヘブライ人の王国

　　　ダビデ王とソロモン王

　　　統一王国の分裂→南：ユダ王国、北：イスラエル王国

　・アッシリアによるイスラエル王国滅亡

　・新バビロニアによるユダ王国滅亡

　　　バビロン捕囚→ユダヤ教成立（旧約聖書編纂）

**前2千年紀のオリエント・東地中海世界**

○オリエント（西アジア）の風土

メソポタミアとエジプト　「肥沃な三角地帯」の中心部　一次文明

シリアとアナトリア　大河と流域平野に恵まれない→雨・雷への信仰　二次文明

○カナン人の小都市国家（部族国家）群　アッカド語キナッフ（染料：紫貝）に由来

　　　西セム語系（アッカド）の土着民

　　　砂漠の遊牧民アモリ人fromアラビア半島（山間部に小規模な定住地を形成）

　　　北方から馬を持って南下してきた印欧系　例：ヒッタイト、ミタンニ

　　　北方から移住してきたフルリ人

　・水源地や牧草地をめぐる都市国家間の抗争

　・干ばつや飢饉のときには転々と流転（都市国家離脱者＋遊牧民）

　※ヒクソス：東方からエジプトに侵入した異民族の総称

　　　　　　　セム人、アーリア人、フルリ人の混成集団

　※ハビル（アピル）：社会階層（移住者、寄留者、被保護者など）説？

　　　　　　　　　　　源ヘブライ人説？　法的保護を持たない不安定な生活状況

　※海の民：離合集散しながら東地中海沿岸部に出没した故郷離脱者集団

　　　　　　ミケーネ文明の崩壊、トロイヤ王国の破壊、ヒッタイト王国の滅亡、北シリ

ア諸国（ウガリトなど）の滅亡

ペリシテ人のパレスティナ海岸平野定住

　　※フェニキア：ギリシア語のフェニックスに由来

　　　　　　　　　古代レヴァント沿岸一帯の住民

　　　　　　　　　　青銅器時代　カナン人

　　　　　　　　　　鉄器時代　フェニキア人

　　　　　　　　　　　イスラエル人・ペリシテ人の侵入、アラム人諸国家の建設

　　　　　　　　　　　ミュケナイ・エジプト・ヒッタイトの覇権の衰退　∵海の民

　　　　　　　　　　　カナン人国家の再建→ミュケナイの国際交易路を継承し海上交易の

覇権を築く

アルワド：海の中にある避難所、船乗りの町

ビブロス：エジプトとエーゲ海を結ぶパピルス交易、木材調達

ベルータ：現ベイルート　1993～96市街地発掘

シドン：古くからの貿易港

ティルス：本土＋島部、主神メルカルト、植民市カルタゴの建設

　　　　　　　　　アルファベットの開発

　　　　　　　　　　原カナン文字／原シナイ文字→読み書き能力の普及への助走路

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　→フェニキア文字

　　　　　　　　　　ヒエログリフ系統と楔形文字系統のアルファベット→うまくいかず

　　　　　　　　　　　⇔フェニキア＝周辺革命（遅れの意識から）

　※イスラエルの成立

　　　オールブライト説：武力によるカナン征服

　　　　　　　　　　　　考古学の証拠：エリコ、アイ（パレスティナ侵入以前に破壊）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　デビル、ラキシュ（前13世紀後半に破壊）

　　　アルト／ノート説：平和的カナン定着

　　　　　　　　　　　　半遊牧民（小家畜飼育者（季節で移動））が徐々に定着

　　　　　　　　　　　　12部族からなる部族連合→定期的に聖書に集まり契約更新祭

　　　メンデンホール説：アルト／ノート説の発展

現代人は農耕と牧畜を対称的に捉えすぎ

　∵ニュアンスは変われど言葉自体は変わらない

例：農民カインと牧人アベルの兄弟「創世記」

季節によって移動　全員が移動するわけではない

ハビル（アピル）→王と町を嫌う人々

　オリエント一帯に散在　∵エルサレム総督のアクエイアテン

宛書簡

　　　　　　　　　　　　　現存の政治体制への義務を放棄して脱落したカナンの農民

　　　　　　　　　　　　　連帯させた宗教運動（宗教共同体としての結合）

　　　　　　　　　　　　　　By「出エジプト」を経験した集団

　　　　　　　　　　　　　⇔主流　「出エジプト」を経験しなかった集団

　　　　　　　　　　　　十世代仮説：古代世界の政治・社会機構は10世代くらいで消滅・

激変

**前1千年紀のオリエント・東地中海世界（世界帝国の出現と周辺世界）**

○騎馬遊牧民　ユーラシア全体

　※スキタイ人（神出鬼没と機動性への脅威）

　　　前3000年期～時折オリエント（北メソポタミア）へ侵入

　　　防ごう→世界帝国アッシリア

　　（後の匈奴→秦）

　・アッシリア帝国

　　　「肥沃な三日月地帯」の真ん中にある都市アッシュル　交易の中継地

　　　新アッシリア（前1千年紀前半）：大型戦車や騎馬軍団（金属製はみ→騎乗）の登場

　　　強圧の世界帝国：軍事的征服と強制移住政策→帝国の短命

　　　　国際交易の拡大→帝国を越える国際商業ネットワークの成立

　・四国分立：カルディア、メディア、リュディア、エジプト

　・メソポタミア文明の終焉　バビロンの栄華に代表される文明の終焉

　・アケメネス朝ペルシア（前550～330）　パールサ人（印欧系・イラン高原の民）

　　　寛容の世界帝国：貢納と軍役の義務⇔伝統と宗教の尊重

　　　　中央集権体制による帝国支配

　　　　例：通信網の整備　「王の道」、駅伝制

　　　　　　サトラップ（総督）行政の監視、王の目（巡察官）・耳（密偵）

　　　アラム語とアラム文字の採用　諸民族の交流→国際共通語に

　　　　200年にわたる「ペルシアの平和」→新しい世界秩序の形成

　　　※フェニキア人：アルファベットの開発　航海技術の発展

　　　　　　　　　　　アッシリア、ペルシアの海軍

　　　※ギリシア人：アルファベットの普及　普遍的・論理的思考の発端

　　　※ユダヤ人：バビロン捕囚→民族宗教としての一神教

○Karl Jaspers（1883～1969）「歴史の起源と目標」（1949）

　・「枢軸時代」前1千年紀前半にユーラシアの各地で人間の覚醒を促す思想が生まれた

　　∵神々の声が聞こえない→指針を自分で考える

　　　ギリシア：ホメロス（８Ｃ）、タレス（７／6Ｃ）、ピュタゴラス（６Ｃ）、ヘラクレ

イトス（６Ｃ）、デモクリトス（５／４Ｃ）、ソクラテス（５／４Ｃ）

パレスティナ：旧約の預言者たち　エリヤ（～９Ｃ）、イザヤ（８Ｃ）、エレミヤ（７

／６Ｃ）

　　　イラン：ゾロアスター（７／６Ｃ）

　　　インド：ウパニシャッド哲学（７／６Ｃ）、仏陀（６／５Ｃ）、ヴァルダマーナ（６

／５Ｃ）

　　　中国：諸子百家　孔子（６／５Ｃ）、老子（６／５Ｃ）、墨子（５Ｃ）、荘子（４Ｃ）、

　　　　　　孟子（４／３Ｃ）

○古代ユダヤ教史（神殿・祭儀の宗教から法・実践の宗教へ）

　・第一神殿時代（～前586）　カナン定住～エルサレム神殿崩壊

　　　ダビデ家の世襲王権（実は一部族程度の王？）　世襲の祭司権　エルサレム神殿

　　　預言者信仰（偶像崇拝批判、背信の叱責、社会倫理的訓戒→イスラエルの民の再生）

　・第二王朝時代（後70）　バビロン捕囚・帰還～エルサレム神殿崩壊

　　　「モーセの法」に耳を傾けるユダの民の自覚

　　　祖国滅亡と他国追放が神への背信行為にある→神の法への誓約

　　　宗教共同体の形成

　・ヘレニズム時代

　　　ダビデ末裔でないハスモン家による王権復活（神殿・大祭司・王権）

　・異民族ローマの支配

　　　偶像崇拝を許さぬ一神教としての自覚

　　　ローマへの頑強な抵抗運動→神殿の破壊と民族の離散

　・ミシュナ・タルムード時代（～500頃）　ミシュナ、バビロニア・タルムード編纂

　　　ラビが指導者として台頭→ラビ・ユダヤ教／模範的ユダヤ教

　　　　モーセ五書などの正典化　口伝の法伝承の編纂→法の宗教の形成

　　　　神の教え（トーラー）を中心とする宗教として再生

　　　　　最も敬うべきは神

　　　　　神殿、政治権力、父祖の土地を喪失した代償として

　・神々の中の神　not唯一神→モーセ：唯一神

　　　出エジプト記「彼がすべての神々にまさって偉大」

　　　申命記「神々の中の神」

　　　詩編「全ての神にまさるお方」

　・イスラエルの重層的信仰

　　　民族／国家：for安寧・国力・戦勝・王権→民族神／国家神としてのヤハウェ

　　　地域：for豊穣・転載ひき・共同体正義→崇拝のせめぎあい

　　　家族：for無病息災・子孫繁栄・先祖供養→神々や女神らの崇拝

**ギリシア**

○都市国家以前　ミュケナイ時代（前２千年期後半）→× by海の民

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　潰されたのは王宮だけ？

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　民衆は無事→集住

　・線文字Ｂの解読　オリエント専制王政に類似　notポリス的

　　　王宮：王（wanaka）、奴隷

　　　村落（damo）：豪族（qasireu→basileus）、民衆（damo）

　　　ホメロス「イリアス」　神々の声

○都市国家の成立：土地条件の良い場所に民衆が集中→シュノイキスモス（集住）

　　　ポリス：中心市と田園部、沿岸部

　　　エトノス：多集落連合国家（非ポリス国家）、内陸、集住しない

　・ポリスの理念：農耕市民の戦士共同体

　　　ポリス成立初期

　　　　族長としての王（バシレウス）の統率

　　　　貴族・平民の党争→平民層を従えた有力貴族間の対立・抗争

　・僭主政：身分は低くても可

　・アルコン（為政者）選びで争い→ソロンの改革→ソロン死亡→

１０年間アルコン不在（アンアルコン→アナーキー）→

平民層の不満→武力による一種の独裁制（前６世紀半ば）：反ポリス的

・ペイシストラトス：聡明な独裁者、平穏と国力の充実、

死後子の一人がペルシャへ亡命→ペルシャ戦争

○古典期ギリシア（前５～４世紀）

　・クレイステネスの改革（前508）

　　　区の創設：アテナイ民主政完成の前提となる「制度」的枠組み

　　　　　　　　10部族に編成、評議会に代表派遣

　　　　　　　　デモス登録→市民権

　・ペルシア戦争　オリエントとギリシア　「歴史の父」ヘロドトス

　　　前490　第1回　マラトンの戦い

　　　前480　第2回　サラミスの海戦

　　　　テミストクレス将軍の海軍主義→下層民（漕ぎ手として戦争協力）の国政参加

　・アテナイ民主制

　　　前477　デロス同盟結成　∵対ペルシア

　　　ペリクレス時代（前462～429）クレイステネスの姪の子

　　　　内は民主主義、外は帝国主義　アテナイはギリシア随一の富裕国に

　　　　前454　デロス同盟金庫のアテナイ移転・着服→「アテナイ帝国」化

　　　　前451　ペリクレスの市民権法→市民身分の閉鎖化

　　　　前432　パルテノン神殿の完成

　・ペロポネソス戦争

　　　アテナイの凋落、スパルタの覇権

　・ポリスの変質

　　　前4世紀前半におけるスパルタ勢力とテーベ勢力の競合

　　　諸勢力・ポリスの国々が弱体化

　・ペルシア英国の影響力の増大　例：大王の和約（前386）

　　　傭兵の一般化→市民皆兵制の崩壊

○古典期の文化

・辺境（東）：オリエント側（文化深い）→イオニア

・悲劇と喜劇「悲劇は平凡な人間より優れたものを求めるが、喜劇は愚劣なものを好む」

　　　アイスキュロス・ソフォクレス・エウリピデス（3代悲劇作家）

　　　アリストファネス（富裕市民による公共奉仕）

　・哲学と科学

　　　イオニア自然哲学　タレス（万物の根源は水）、ヘラクレイトス（万物流転「パンタ・

レイ」）

　　　ソフィスト　諸学とりわけ論理学と修辞学

　　　　○民主的議論　×主観主義による公衆道徳の崩壊

　　　　ソクラテス・プラトン・アリストテレス

　　　　数学（ピタゴラス）、医学※（ヒポクラテス）

　　　　歴史学※（ヘロドトス、トゥキディデス）　※過ぎ去ったものを扱う

　・古典期（クラシック）の美術

　　　動きと安定を結び合わせたコントラポスト

　　　崇高と高貴のパルテノン芸術

**フェニキア**

○造船技術＋航海技術→西方への海外進出

　・基幹産業（染色・織物・金細工・象牙細工）の市場拡大と原材料調達

　　　キプロス・サルディニアの銅

　　　イベリア半島の銀

　・中継貿易の拠点として栄えるフェニキア人の都市

　　　前9世紀からのアッシリアの西方遠征　∵フェニキアからの貢納目的

　　　前814　カルタゴ建設　∵アッシリアの脅威の排除

　　　シドンとティルスのアッシリアへの朝貢拒否→アッシリアの報復

　　　新バビロニアへの朝貢→自治の回復

○子音文字アルファベットの確立＝世界史上最大の発明

　　商人と船乗りによりギリシア世界に伝達

**多神教徒一神教のはざまで**

○前1000年の衝撃　この頃から二分心が衰退、意識が芽生える→心の空間＋物語化

　・二分心の痕跡

　　　アポロンの神託（デルポイ、プトオス、ブランキダイ、クラロス）

　　　偶像崇拝の流行（パウロ、パウサニアス、信託衰退に代わるもの）

　　　預言者と憑依　神々の声の代弁（二分心の時代には神は人の口を通して語らない）

　　　詩　最初の詩人は神々

　　　音楽　右脳刺激→神の声ひきだす　女神ムーサ

**神々への祭儀　ギリシアの宗教**

○敬神（宗教＞世俗）　災いを免れる

　　ユダヤ教：実際に災いにあう＝自らに神の罰

○祭儀：神々と人間の互酬的関係

　・集団的な意志と利害関係を明示

　・互いの絆の確認

　・正しい儀式＝成功へのプロセス

　　　信託：ポリスの意志決定を神の判断として聖別し迷いを封じる

　　　神々：不死なる存在　例：オリュンポス12神

　　　半神：死すべき存在　例：へロス→ヒーロー　地域社会における半神崇拝

○固有名詞としての神名の脱落傾向

　神格と人格の分離傾向

　　・ますます人間味を増す神々（一神教の芽生えかも？）例：ルキアノス「神々の対話」

* 神格の抽象化

**ヘレニズム世界（前４〜前１世紀）**

* マケドニア王国

　•ドーリス系王朝のエトノス（非ギリシア人）国家　農耕と牧畜

　•フィリッポス２世による軍事力強化（騎馬軍団の充実、長槍（サリッサ）の威力）

　　　カイロネイアの戦い（前338）　アテナイ•テーベ連合軍撃破

　　　コリントス同盟結成（前337）　ギリシア諸ポリス支配

　•アレクサンドロス大王の東方遠征（前334〜）

　　　グラニコス河の戦い（前334）→イッソスの戦い（前333）→エジプト征服

　　　→ガウガメラ／アルベラの戦い→スサ占領（前331）→ペルシア滅亡（前330）

　　　→インダス川流域→バビロン帰還（前323）同地で死亡

　•ギリシア世界とオリエント世界の融合（？）

　　　オリエントのヘレニズム化orギリシアのオリエント化

　　　　オリエント→ギリシア：普遍化、論理的→ヘレニズム：シンクレティイズム（宗

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　教混合）

　　　　　例：イシス（エジプト）→マリア

　　　混血促進　ギリシア人の集団移住

　　　専制君主制＝帝国支配継承

　　　　ギリシア人を中枢にしたペルシア人官僚

　　　　軍の再編　マケドニア人とペルシア人の混成部隊

　　　コイネー（共通語を）公用語に　ヘレネス（ギリシア人）の文化基盤

　•デイアドコイ（後継者）の争い（約４０年間）

* ヘレニズム諸国家（勢力均衡→比較的平穏）

　•セレウコス朝シリア（前312〜前63）　首都：セレウキア→アンティオキア

　　　アフガニスタンーシリア　推定人口3000万

　　　ペルガモン王国（前262〜前133）：ローマと結ぶ（図書館／ゼウス祭壇）

　　　バクトリア王国（前255〜前139）：大夏→クシャーナ朝

　　　パルティア王国（前248頃〜後226）：ペルシア人勢力の独立

　•アンティゴノス朝マケドニア（前306〜前168）

　　　ギリシア的統治体制による支配　ローマとのピュドナの戦いで滅亡

　•プトレマイオス朝エジプト（前304〜前30）　首都アレクサンドリア

　　　首都アレクサンドリアの繁栄　∵産業の統制

　　　　　　　　　　　　　　　　　　ヘレニズム文化の集大成　atムセイオン

* ギリシア文化を共通項とする地中海世界•文化の成立

　•ヘレニズムかの助走路としてのオリエント文明

　•コイネーの普及

　　　多様な言語によるオリエントの学問•思想をギリシア語で表現

　　　普遍的な言語⇔普遍的な学問　例：論理学、数学、天文学、医学

　•ギリシア人の都市（もはや都市国家＝ポリスではない）の建設

　　　∵広範囲の覇権（王国）という枠組み

　　　交易ネットワークの結節点　∵コイネーという交流の基盤

　•空前絶後の宗教混合（シンクレティズム）

　　　〜314 ミラノ勅令byコンスタンティヌス帝、イスラム

　　　ギリシア宗教の変質　例：ディオニュシオス（東方に起源）祭礼

　　　オリエント系の宗教　例：イシス女神→マリア

　　　運命の克服：災厄防ぐ、生まれた土地の宗教を信仰

　　　　　↓←広い地域の交わり

　　　救済の宗教：入信の儀式、運命から救われる

　　　　ユダヤ人のメシアだけじゃない

　　　　　ユダヤ教：民族宗教としての一神教＝布教活動しない

　　　　⇔キリスト教等：世界宗教としての一神教＝活発な布教活動

　　　コスモポリタニズムと個人意識

　　　　ストア派（禁欲主義）とエピクロス派（快楽主義）

　　　世界史三大事件の一つ　残りは狩猟と採集からの農業革命、産業革命

　•ヘレニズム美術

**カルタゴ（前814〜前146）**

○フェニキアとカルタゴの関係は近代におけるイギリスとアメリカの関係

○ローマとの覇権闘争→ポエニ戦争

　　•第三回ポエニ戦争　共和政ローマがコリントスも支配→実質的に帝国に

**ローマ共和政（前５〜１世紀）**

* 西地中海の先住民族とローマ人

　•西地中海世界先住の地中海人種（母権制社会）

　　　ベルベル人：北アフリカ、イベレス人：イベリア半島、シカニア人：シチリア島

　　　•イベリア系、エリュモス人：シチリア島•小アジア系、シケリア人：シチリア島

　　　•イタリア系、サルドイ人：サルデーニャ島、エトルリア人：小アジア系？•トス

　　　カナ地方に

　•ギリシア人とフェニキア人

　　　マグナ•グラキア（ギリシア本土以外のギリシア植民都市を含めた文化圏、高度な

　　　文明に接触→魅了される）とシチリア

　　　カルタゴ

　•印欧語系諸民族の移住（父権社会）

　　　ケルト人：イベリア半島•フランス•イギリス•アイルランド、古イタリア人：ラテ

　　　ィーノ•ファリスキー系→ラテン人→ローマ人•ウンブロ•サベリー系•ウェネト•

　　　イリュリー系

　•エトルリア人とローマ人

　　　ヴィラノヴァ文化（初期鉄器時代）＋オリエント化→“ラセンナ”（エトルリア人

　　　の自称）

　　　エトルリア人の都市国家と海上交易→勢力圏拡大

　　　　王政期ローマの王（５•６•７代）エトルリア勢力の覇権下

　　　　城壁建造　クラシス•ケントゥリア制（財産級市民兵団と選挙制度）

　　　　トリブス区分（戸口調査による市民登録）　重装歩兵密集隊

　　　領域拡大と市民団の増大→ラティウム（帝国の首都）におけるローマの優越

　○都市国家から世界帝国へ

　　•イタリア半島の征服

　　•ポエニ戦争→西地中海世界における覇権

　　•マケドニア•ギリシアの征服→東地中海世界における覇権

　　•カルタゴの破壊•マケドニアの属州化→前146の地中海世界帝国

* ローマの国制：S.P.Q.R(Senatus Populusque Romanus)「元老院とローマの人民」主

　　　　　　　権者を表す

 身分制秩序

　　　　　　　Civitas（市民団）=Res Publica（国家）

　　　　　　　政体循環論代＜混合政体論＝貴族制＋民主制＋独裁制

　　　　　　　身分闘争→貴族と平民有力者→新貴族の台頭（元老院支配）

* 公民権政策の解放性

•ギリシア•ポリスの閉鎖性（両親がアテネ人の子供のみ）＜ローマの開放性（解放

　奴隷にも、購入可）

* ローマ人の宗教

•保守主義＝厳格な手続き、清廉潔白、神々への誓約の尊重

　ローマ人のreligio（慎み）→祭儀宗教→国家および共同体の鎮護

　「征服されたギリシアが野蛮な征服者を虜にした」byホラティウス

　　ギリシア人のtheoria（観）→祝祭宗教→個人救済

* 共和政社会の動揺

　•都市国家＝農耕市民戦士共同体の限界

　　　征服戦争と支配領域の拡大＝農作業離れる人も→大土地所有→奴隷制ラティフン

　　　ディア＝土地所有の集積＋征服地からの奴隷労働力

　　　Roman Imperialismをめぐって→ポリス（農耕市民の共同体）の意味を失う

　　　　外敵の脅威→先手防衛論

　　　　騎士身分層の台頭：外地へ投資目指す→外へ

　　　　平民の不満そらす（土地所有の機会を与える）

　　　　群集心理：共和政ファシズム

　　•グラックス兄弟の改革

　　　国防力の再建＝中小土地所有者（自作農）増大

　　　大土地所有廃止but失敗→内乱

　　→党派（factio）の争い　閥族派（スッラ）vs平民派（マリウス）

　　•有力武将の台頭と元老院支配の凋落

　　　権威あるもの＝武勲、財産、雄弁

　　　　ポンペイウス：武勲　クラッスス：財産　カエサル：度量

　　　独裁者カエサル？　∵急速な改革が権力の座につくためととられた？

　　•広大な支配領域の統治システム＝共和政体制の限界

　　•後継者オクタウィアヌスによる元首支配　∵カエサルの二の舞にならぬよう

**地中海世界帝国と「ローマの平和」**

* 地中海世界

　•オリエント世界•ギリシア世界•ラテン世界＝土台

　　→ローマ帝国（地中海世界帝国）

　　　→イスラム•アラブ世界•ビザンツ•スラブ世界•ラテン•ゲルマン世界

* 古代地中海世界の近代性

　•穏やかなる内海•海賊の一掃→（近代（地球規模）の）海域世界の先駆け

　•日常生活物資の海上交易

　　　日常生活に密着した物資•情報の交換→文化の交流→文明融和の基盤

* 文明融和の核としての皇帝

　•賢帝とは？

　　　アウグストゥス帝：今日は政体の中の元首支配の確立

　　　　〜ネロまでカエサルの血を引く（ユリウス•クラウディウス期）

　　　ウェスパシアヌス帝：帝国の安定、肝要、ユーモア、質素

　　　　　　　　　　　　　コロッセオ建設

　　　　　　　　　　　　　地方貴族出身

　　　•五賢帝（人類史の至福の時代byギボン）自分の血に近いものを皇帝にせず

　　　　ネルウァ帝（96〜98）：圧政からの開放感

　　　　トラヤヌス帝（98〜117）：威厳と温情主義、軍事功績、ダキア戦争→最大版図

　　　　ハドリアヌス帝（117〜138）：国境の防備、属州の巡回→長城、文化と芸術→パン

　　　　　　　　　　　　　　　　　　テオン

　　　　アントニヌス•ピウス帝（138〜161）：野心のなさ、、誠実と正直

　　　　マルクス•アウレリウス帝（161〜180）：哲人皇帝、苦境を誠実に生き抜く

○地中海世界の混迷と再編（3〜4世紀）

　・セウェルス家の支配

　　　元老院の意向＜軍隊の意向

　　　　軍事力の強調　セウェルス帝の遺訓「心を合わせよ、兵士を富ましめよ、他の物は

すべて蔑視せよ」

カラカラ勅令による全自由人へのローマ市民権の付与（212）

　市民法と万民法の一体化→帝国公民権：自治と自由の平準化／低下

　・「3世紀の危機」

　　　財政危機⇔経済（通貨）危機：粗悪な通貨→インフレ⇔社会危機

　・軍人皇帝時代（235～284）　半世紀で26人の皇帝

　　　社会不安の増大→古典文明の変質（東方宗教浸透）→古代末期の世界

**古代末期の世界へ**

○東方宗教の浸透とキリスト教集団の出現

　・イシス、ミトラス、キュベレ、デメテル、バッカスなどの受容・拡大

　・ナザレのイエス→イエス運動（ユダヤ教の異端運動？）

　　　原始キリスト教の段階ではほとんど認知されていない

　　　3世紀半ば　帝国全土の規模における迫害byデキウス帝

○世界宗教としての一神教

　・「ローマの平和」Pax Romanaの時代　多神教世界帝国　例：パンテオン（万神殿）建設

　　　異教世界の「みだらさ（みだらであること）」という言説

　　　　∵4世紀（ミラノ勅令）以降の資料はそれまでの400年間分の2倍

　　　ヘレニズム世界のシンクレティズム＝東方：土着の宗教、ごちゃ混ぜ

　　　自分の内なる世界を豊かにする（←物質的、無病息災願う）

　　　　例：ストアハ（禁欲主義？）：自然の秩序に従う生活→アパテイア（不動心）

　　　　　　エピクロス派（快楽主義？）：快適な生活→「隠れて生きよ」

　　　　一神教世界への道のり　「行為の倫理」だけではなく「心の倫理」を重視

　※～3世紀半ば　信徒は人口の1％以下

　　　∵民族の限界：ユダヤ人、ギリシア人

　　　　居住地の限界：大都市部　例：ディアスポラ（＝パレスチナ外で離散して暮らす）

のユダヤ人

　　　　階層の限界：中下層民

　　これらの限界の打破→3／4世代の間で爆発的に増加

　　　∵１）十字架で主が犠牲になるという物語の理解しやすさ

　　　　　　生贄の儀礼は古代人の常識→「神の子たる救い主が十字架にかかる」

　　　　２）貧しく抑圧された下層民の怨念

　　　　　　貧者に同情する富者→福音への理解　∵恵まれた者の慈愛の念

　　　　　　「貧しい者は、幸いである。神の国はあなた方のものである」

　　　　　　「富裕な人々は不幸である。もうこの世で慰めにあずかっているからだ」

　　　　３）心の豊かさを求める禁欲意識→欲望を汚れたものとみなす意識

　　　　　　ヘレニズム期以来の心性の土壌とパクス＝ローマーナ（ローマの平和）

　　　　　　　→物質の豊かさ達成→心の豊かさ＝心の内なる世界に向かう精神

　　　※祭礼の重視（以前）→「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし

て、あなたの神である主を愛しなさい」

　　　　「姦淫するなかれ」（行動）→「淫らな思いで他人の妻を見る者はすでに心の中で

その女を犯したのである」（精神）